

小学校 5, 6 年生とその保護者を対象とした岐阜薬科大学附属薬局での
「お薬の正しい使い方教室」の実施

島内あかり¹, 塚 千紘^{1,2}, 玉木啓文^{1,2}, 矢島聖子¹, 森 美穂¹, 西尾裕斗¹, 山下修司^{2,3},
野口義紘^{2,4}, 伊野陽子^{1,2}, 井口和弘^{1,2}, 寺町ひとみ^{2,4*}

**Drug safety seminar for fifth and sixth grade elementary school pupils and their parents
at Gifu Pharmaceutical University Pharmacy**

Akari Shimauchi¹, Chihiro Sakai^{1,2}, Hirofumi Tamaki^{1,2}, Satoko Yajima¹, Miho Mori¹,
Hiroto Nishio¹, Shuji Yamashita^{2,3}, Yoshihiro Noguchi^{2,4}, Yoko Ino^{1,2},
Kazuhiro Iguchi^{1,2}, Hitomi Teramachi^{2,4*}

Our pharmacy seminar for fifth and sixth grade elementary school pupils and their parents was held as part of community activities of Gifu Pharmaceutical University Pharmacy. It consisted of two parts: a lecture and an experiment; the survey was conducted before and after the lecture to evaluate the short-time effects. The lecture was based on Japan Society of School Health's drug safety publications for elementary school pupils. The survey showed improvement in participants' knowledge and attitude in all questionnaire items. We hope that the community pharmacy holds a program on drug safety to provide educational and health support in the neighborhood.

Key words: Drug safety seminar, Health support, Community pharmacy

Received May 5, 2019; Accepted August 28, 2019

¹ Akari Shimauchi, Chihiro Sakai, Hirofumi Tamaki, Satoko Yajima, Miho Mori, Hiroto Nishio, Yoko Ino, Kazuhiro Iguchi 岐阜薬科大学薬局薬学研究室

² Chihiro Sakai, Hirofumi Tamaki, Shuji Yamashita, Yoshihiro Noguchi, Yoko Ino, Kazuhiro Iguchi, Hitomi Teramachi 岐阜薬科大学附属薬局

³ Shuji Yamashita 岐阜薬科大学実践社会薬学研究室

⁴ Yoshihiro Noguchi, Hitomi Teramachi 岐阜薬科大学病院薬学研究室

* 連絡先：岐阜薬科大学実践薬学大講座病院薬学研究室 寺町ひとみ

〒501-1196 岐阜市大学西1丁目25番地4 Email: teramachih@gifu-pu.ac.jp

1. 緒言

2015年に厚生労働省が示した患者のための薬局ビジョン¹⁾においては、薬局が健康サポート機能を持つことが推奨されている。健康サポート薬局では、具体的には、医薬品等の安全かつ適正な使用に関する助言を行うことや地域住民の健康サポートを積極的かつ具体的に実施することが求められている。いくつかの薬局においては、薬剤師体験や血圧、血糖測定等の健康サポートイベントの開催がなされており²⁾、健康サポート薬局は広がりつつある。しかし、健康サポート薬局の届け出件数は、全国で1355薬局(2019年3月29日時点)³⁾であり、日本における全薬局数に対してわずかである。そのため、健康サポート薬局はまだ普及しているとは言えず、健康サポート薬局としての活動を具体的に提示し、重要性を示していくことが必要であると考えられる。

薬剤師の地域活動として、児童を対象とした薬剤師による「医薬品に関する教育」が重要視されており、様々な教育が実施されている^{4,5)}。現在、義務教育において、中学校学習指導要領では、医薬品の正しい使い方に関する内容は含まれているが、小学校学習指導要領には当該内容は含まれていない。小学生時に医薬品の正しい使い方に関する知識を習得し、医薬品に関する理解を深めることにより、医薬品の適正な使用に影響することが報告されており⁶⁾、小学生においても医薬品の正しい使い方について学ぶことは重要である。また、小・中・高校生を対象とした研究において、児童生徒が医薬品を使用する際、最も身近な相談相手が保護者(両親や祖父母)であることが示されており、生徒の正しい医薬品使用を促進するためには保護者が正しい知識や態度、行動をもつことが重要

であると考えられる⁷⁾。児童のみならず親子による行事参加は、親子のコミュニケーションを増やすきっかけにもなり⁸⁾、親子間のコミュニケーションを通して、子供の生活技術の定着を図ることができるといった報告がある⁹⁾。すなわち、児童の知識理解にとどまらず、生活技術としての定着のためには、児童のみではなく、親子参加の教室にするほうが有効であると考えられる。

これらのことから、今回我々は、薬局において小学校5、6年生とその保護者を対象とした「お薬の正しい使い方教室」(以下、教室)を開催した。また、講座の短期的効果を評価することを目的にアンケート調査を行った。

2. 方法

(1) 対象者と研究デザイン

教室は、岐阜薬科大学附属薬局において2018年8月2日に実施した。対象は、公募により参加申し込みのあった小学校5、6年生とその保護者とした。

教室は、講座と体験の二部構成とした。すなわち、講座後に体験を行い、アンケート調査は講座の前後に行った。

参加者の公募は、岐阜薬科大学附属薬局から半径3 km以内の岐阜市立の小学校6校の学校長あてに5、6年生への案内資料の配布を依頼した。その結果、6校全ての学校長より了承が得られ、当該小学校の5、6年生に案内が配布された。参加申し込みは、岐阜薬科大学附属薬局のwebサイトにて、2018年5月29日から2018年7月1日まで受け付けた。申し込みのあった参加者には、後日、事前案内用紙を配布した。なお、事前案内用紙には、アンケート結果が、学会発表や論文での報告に使用されることがあること、プライバシーの保護には十分に

配慮すること、調査に協力しないことにより不利益が生じないこと等を記載した。なお、本研究は「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守し、岐阜薬科大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：30-15）。

(2) 講座内容

医薬品の正しい使い方に関する学習項目や表現方法等は、公益財団法人日本学校保健会作成の医薬品教育資料「くすりってなあに？」¹⁰⁾および医薬品の正しい使い方指導者用解説¹¹⁾を参考にして検討した。講座内容は、自然治癒力、健康三原則、薬の剤形、薬の主作用・副作用、薬を使う時の「きまり」、薬を使う時の工夫、薬を使う時の約束とした。また、スライドは児童の理解度を高めるために、イラスト、写真、およびアニメーション等を使用した。講座は、岐阜薬科大学附属薬局の薬剤師 1 名が行い、補助を別の薬剤師 1 名と薬学生 4 名で行った。なお、講座時間は 40 分とした。

(3) 体験内容

体験は、参加児童を 3 グループに分け、1 グループごとに補助員 1 名が付き、それぞれ指導を行った。体験の内容は、お薬カレンダーのデコレーションと模擬調剤体験を行った。お薬カレンダーのデコレーションは、ペンやシールを用いて行った。模擬調剤体験は、医薬品の代わりに錠剤としてチョコレートやラムネ、また散剤の代わりにココアパウダーと粉砂糖を用いて行った。

(4) 調査方法

アンケート調査は、「お薬の正しい使い方教室」に参加した児童とその保護者を対象とした。事前アンケートは児童とその保護者、事後アンケートは児童に対して実施した。アンケートの

目的は、児童および保護者の医薬品使用に関する実態調査と、講座の有効性を評価することとしたため、調査項目は講座の内容に沿うよう独自で作成した。アンケートの質問項目として、児童用の事前アンケートの質問項目は、学年、性別、苦手経験、服用時の工夫、自己使用経験、自己使用に対する態度、自然治癒力（知識）、自然治癒力（内容）、薬の剤形、薬を使う時の注意点、用語知識、講座経験とした。児童用の事後アンケートは、服用時の工夫（自由記述）、自己使用に対する態度、自然治癒力（内容）、薬の剤形、薬を使う時の注意点、用語知識とした。保護者の事前アンケートは、児童との間柄、年齢、参加のきっかけ、薬に関する情報源、専門家、服用時の工夫、説明、用量増減、回数増減、児童の自己使用に対する態度、薬を使う時の注意点、用語知識とした。

また、児童用のアンケートは、小学校 6 年生までに学習する漢字を使用し、使用した漢字にはふりがなをつけた。また、児童および保護者の事前アンケート用紙には、調査協力への同意欄を設けた。

アンケートは無記名自記入式とした。児童の事前・事後アンケートおよびその保護者のアンケートのデータを対応のあるデータとするために、アンケートに予め ID を打ち、追跡可能とした。その際、ID と氏名との連結は行わず、プライバシーの保護に配慮した。受付時に児童用事前・事後アンケートおよび保護者用アンケート計 3 枚が入った封筒を児童と保護者の各組に配布し、記入後に回収した。

3. 結果

(1) 薬局における「お薬の正しい使い方教室」の実施

参加申し込みのあった児童は 13 名であり、

最終的に 12 名の児童が当日参加した。児童には白衣と名札を配布し、着用して講座に参加してもらった。参加児童 12 名を 3 グループに分け、各グループに補助員が入り対応しやすいよう工夫した。

1) 講座について

講座の最初には、アイスブレイクとしてグループごとに自己紹介をしてもらった。講座の間には、〇×クイズや意見の発表を行い、参加型の講座となるよう工夫した。また、講座中には、補助員が適宜児童に声掛けを行い、理解を促した。そして、児童にとって身近な問題であることを認識できるよう、説明を行う際にはできるだけ具体例を挙げた。例えば、お薬を使う時の工夫については、お薬を使う人が子供の場合と高齢者の場合を例示し、お薬を使う時に、子供と高齢者とではそれぞれどのようなことで困ることがあるかを考え、それらの問題に対して、どのような工夫ができるかを紹介した。講座の最後には、穴埋め形式の簡単な課題を行い、講座の内容を復習することで知識の定着を図った。

2) 体験について

体験は、お薬カレンダー作りと模擬調剤体験を行った。お薬カレンダー作りについては、講座中に、お薬を飲むときの工夫として、お薬カレンダーを使って薬の飲み忘れや飲み間違いを防ぐことを伝え、お薬カレンダーの使い方を理解してもらった。また、どのようにデコレーションをすると、薬の飲み忘れ・飲み間違いが減らせるのかを例示した。デコレーション後は、錠剤に見立てたお菓子をお薬カレンダーに配置してもらい、お薬カレンダーの使い方を確認した。

模擬調剤体験においては、最初に処方箋の見

方、薬袋の書き方を説明した。具体的には、模擬処方箋を見ながら錠剤と散剤の調剤を行い、薬袋に必要な用法用量等を記入してもらった。錠剤は、PTP 包装された円形のチョコレートおよびラムネを用いた。散剤は、ココアパウダーと粉砂糖を乳鉢で混ぜ合わせて、薬包紙を用いて一包化した。

(2) アンケート結果

参加人数は児童 12 名、保護者 12 名であった。アンケート回収率（事前・事後）は 100.0%（12/12）、有効回答率は児童 100.0%（12/12）、保護者 100.0%（12/12）であった。

1) 参加者について

参加者について表 1 に示す。参加した児童の学年は 5 年生が 83.3%と多かった。また、女子の参加者が 75.0%と多かった。お薬を使う時の苦手経験は半数の児童が「ある」と回答していた。服用時の工夫は、全ての児童が、「ない」と回答していた。保護者や先生に相談せず自分で判断して薬を使用した経験は、8.3%の児童があると回答した。お薬に関する授業を受けた経験は、91.7%の児童が「ない」と回答した。

参加した児童の保護者は全員母親であった。今回の講座に参加したきっかけとしては、子供が薬剤師に興味がある場合や、近所での行事であること等がきっかけとして挙げられていた。（結果未記載）

2) 講座前後における児童のアンケート結果の比較

講座前後において、自己使用に対する態度および知識に関する質問への回答の比較を行った。講座前後における児童のアンケート結果を比較したものを表 2 に示す。講座後は、知識に関する全ての質問項目において、知っていると

表1 参加者情報

児童

質問項目	回答項目	回答率	
学年	5年生	83.3%	(10/12)
	6年生	16.7%	(2/12)
性別	男	25.0%	(3/12)
	女	75.0%	(9/12)
苦手経験	ある	50.0%	(6/12)
	ない	50.0%	(6/12)
服用時の工夫	ある	0.0%	(0/12)
	ない	100.0%	(12/12)
自己使用経験	ある	8.3%	(1/12)
	ない	91.7%	(11/12)

保護者

質問項目	回答項目	回答率	
児童との間柄	母	100.0%	(12/12)
	父	0.0%	(0/12)
	祖母	0.0%	(0/12)
	祖父	0.0%	(0/12)
	その他	0.0%	(0/12)
保護者の年齢	20代	0.0%	(0/12)
	30代	33.3%	(4/12)
	40代	66.7%	(8/12)
	50代	0.0%	(0/12)
	60代	0.0%	(0/12)
	その他	0.0%	(0/12)

する回答が 100.0%となった。薬の剤形については、教育前において「注射する薬」を知っていると回答は 58.3%であり、最も低かった。薬を使う時の注意点においては、教育前に全ての児童が「使う量を守る（1回何錠）」および「使う回数を守る（1日何回）」を知っていた。一方で、「コップ一杯の水またはぬるま湯で飲む」を講座前に知っているとした回答は、50.0%と低かった。用語知識については、「自然治癒力」の講座前の認知度が最も少なく、25.0%であった。

また、服用時の工夫について、事前アンケートにおいては薬を使う時に工夫したことは「ない」と児童の 100.0%が回答していた。事後アンケートにおいては、全ての児童が自由記述を記入しており、お薬カレンダーを使い、飲み忘れないようにする、ケースやかごを使う、ゼリーやアイスで飲むといった記述が見られた。（結果未記載）

表2 講座前後の児童の態度、知識の変化

質問項目		講座前		講座後	
自然治癒力 (内容)	適度な運動	66.7%	(8/12)	100.0%	(12/12)
	バランスのよい食事	75.0%	(9/12)	100.0%	(12/12)
	十分な睡眠	75.0%	(9/12)	100.0%	(12/12)
薬の剤形	飲み薬	75.0%	(9/12)	100.0%	(12/12)
	ぬり薬	75.0%	(9/12)	100.0%	(12/12)
	はり薬	66.7%	(8/12)	100.0%	(12/12)
	目薬	75.0%	(9/12)	100.0%	(12/12)
	注射する薬	58.3%	(7/12)	100.0%	(12/12)
薬を使う時の 注意点	使う時間を守る	83.3%	(10/12)	100.0%	(12/12)
	使う量を守る（1回何錠）	100.0%	(12/12)	100.0%	(12/12)
	使う回数を守る（1日何回）	100.0%	(12/12)	100.0%	(12/12)
用語知識	コップ一杯の水またはぬるま湯で飲む	50.0%	(6/12)	100.0%	(12/12)
	主作用	41.7%	(5/12)	100.0%	(12/12)
	副作用	91.7%	(11/12)	100.0%	(12/12)
	処方せん	100.0%	(12/12)	100.0%	(12/12)
	お薬カレンダー	91.7%	(11/12)	100.0%	(12/12)
	自然治癒力	25.0%	(3/12)	100.0%	(12/12)
	薬剤師	100.0%	(12/12)	100.0%	(12/12)

3) 保護者アンケート

保護者に対するアンケートの結果を表3に示す。薬に関する情報源は「インターネットで調べる」および「薬の説明書を読む」が最も高く、回答率は83.3%であった。また、薬に関する情報源として「専門家に聞く」との回答は、12名中7名であったため、表3の「専門家への相談」につい

ては、全体の人数(母数)は7名となっている。薬について訊く専門家については、「薬剤師」が最も高く、100.0%であった。薬を服用させる際の工夫については、75.0%が「ない」と回答した。子供が薬を使う時に、子供に対して説明を「よくする」、または「時々する」と回答したのは75.0%であった。用量増減および回数増減について、

表3 講座前の保護者の態度、知識

質問項目	回答項目	回答率	
薬に関する情報源	専門家に聞く	58.3%	(7/12)
	友人に聞く	8.3%	(1/12)
	インターネットで調べる	83.3%	(10/12)
	薬の説明書を読む	83.3%	(10/12)
	本を読む	8.3%	(1/12)
	その他	0.0%	(0/12)
専門家への相談	医師、歯科医師	57.1%	(4/7)
	薬剤師	100.0%	(7/7)
	看護師	14.3%	(1/7)
	登録販売者	0.0%	(0/7)
	その他	0.0%	(0/7)
服用させる時の工夫	ある	25.0%	(3/12)
	ない	75.0%	(9/12)
説明	よくする	16.7%	(2/12)
	時々する	58.3%	(7/12)
	ほとんどしない	16.7%	(2/12)
	全くしない	8.3%	(1/12)
量増減	よくする	0.0%	(0/12)
	時々する	0.0%	(0/12)
	ほとんどしない	8.3%	(1/12)
	全くしない	91.7%	(11/12)
回数増減	よくする	0.0%	(0/12)
	時々する	0.0%	(0/12)
	ほとんどしない	41.7%	(5/12)
	全くしない	58.3%	(7/12)
子供の自己使用に対する態度	とても良いと思う	0.0%	(0/12)
	良いと思う	0.0%	(0/12)
	あまり良いとは思わない	41.7%	(5/12)
	全く良いとは思わない	58.3%	(7/12)
薬を使う時の注意点	使う時間を守る	58.3%	(7/12)
	使う量を守る(1回何錠)	91.7%	(11/12)
	使う回数を守る(1日何回)	83.3%	(10/12)
	コップ一杯の水またはぬるま湯で飲む	66.7%	(8/12)
用語知識	主作用	41.7%	(5/12)
	副作用	100.0%	(12/12)
	処方箋	100.0%	(12/12)
	お薬カレンダー	66.7%	(8/12)
	自然治癒力	75.0%	(9/12)
	薬剤師	100.0%	(12/12)

100.0%の保護者が「ほとんどしない」または「全くしない」と回答した。子供が自己判断で薬を使用することについて、「全くいいと思わない」と58.3%が回答し、「あまりいいと思わない」が41.7%だった。薬を使う時の注意点については、「使う量を守る」(91.7%),「使う回数を守る」(83.3%)は比較的回答率が高かった一方で、「使う時間を守る」は58.3%,「コップ一杯の水またはぬるま湯で飲む」は66.7%であった。用語知識については、「副作用」,「処方箋」,「薬剤師」を知っていると回答は100.0%であり、最も回答率が低かったのは「主作用」(41.7%)だった。

4. 考 察

現在、薬局が健康サポート機能を持つことが推進されており、薬局薬剤師は地域住民にとってより身近な存在となっていくことが求められている。今回のアンケートにおいては、医薬品の正しい使い方に関する講座経験はほとんどの児童が「ない」と回答していた。小学生に対して講座を行うことで中学生時における医薬品の適正使用に影響するという報告がある⁹⁾。医薬品の正しい使い方に関する教育は、小学生時から行われることが望まれており、学校以外の学習の場として、薬局が、医薬品の正しい使い方に関する教室を開催することは、健康サポート薬局としての役割を担うとともに、地域住民が医薬品の正しい使い方について理解を深めることにつながると考える。

今回の講座は、講座の内容を小学生に対して適切なものとするために、既に教育資料として公開されているものを参考にした。現在までに小学校における医薬品の正しい使い方に関する教育の構築および実施は多くなされており¹²⁻¹⁴⁾、それらを参考にして薬局における講座やイベントに活用していくことも可能であろう。

また、今回は児童だけではなく保護者にも参加を募り、教室を開催した。今回参加した保護者は、30-40代であり、その世代の小学校および中学校時における学習指導要領において、「医薬品を正しく使うこと」といった内容は含まれていない。小学校での医薬品に関する教育は、中学生の医薬品の適正使用の実施頻度を高める要因となっていることが報告されており⁹⁾、小学校時から医薬品に関する教育を行うことで、医薬品に関する理解や医薬品の正しい使い方の実施頻度をより一層高めることができるかもしれない。

保護者のアンケート結果においては、医薬品を使うときの注意点において、使う時間を守る、およびコップ一杯の水またはぬるま湯で飲むの回答率が低く、全ての保護者が医薬品の使い方について正しい知識を持っているわけではないことが推察された。今回の講座において参考にした「くすりってなあに？」¹⁰⁾では、医薬品を使う時の約束として、児童に対して「自分勝手に薬を使用しない」と説明することが記載されている。この説明では専門家や保護者が児童を指導することが求められることから、児童のみならず、保護者についても医薬品の正しい使い方を理解しておくことが重要となる。そのため、児童と保護者が一緒に講座に参加することは、医薬品の正しい使い方について理解を深め、家庭において医薬品を正しく使うきっかけになり得ると考える。他方で、今回、講座の前後におけるアンケート調査では、知識・態度に関する全ての項目において改善している結果となり、事後アンケートで全項目において、知っているとした割合は100%だった。しかしながら、本講座による児童の知識や態度の改善が認められたものの、これらは講座の直後に行った短期的な評価であり、こうした好ましい変化を長期的に維持あるいは強化してく

ことが必要である。児童のみならず、児童にとって身近な存在と考えられる保護者の医薬品に関する知識や態度を同時に向上させることは、より長期的に講座の効果を維持させる上で重要な役割を果たすものと期待される。また、興味深いことに、「コップ一杯の水またはぬるま湯で飲む」は親子ともに知っているとする回答が低い傾向であった。この理由は不明であるが、お薬教室などでの説明することが望ましい項目の一つであると思われる。

医薬品を使う時の苦手経験については、半数の児童が「ある」と回答していた。また、医薬品を使用する際の工夫については、「ある」と回答したのは、児童が 0.0%、保護者が 25.0%であった。児童のうち、薬を使用するのが苦手な理由として、薬が苦い、飲みこみにくい、といった記述が見られた。医薬品を使用する際には、飲み合わせ等を考慮すべきであるが、医薬品を正しく使用していくためには苦手を解消するための工夫も必要となってくる。薬を使用する際に間違った対処法を行うことは、医薬品の効果が十分に得られなかったり副作用のリスクを高めたりする可能性があるため、今回のような教室や日々の薬の受け取り時の服薬指導で、医薬品を使う際の工夫について正しい知識を習得しておくと共に、工夫するには薬剤師や医師に必ず相談することが重要である。

本研究の限界として、二点挙げられる。一つ目に、今回の参加児童数が 12 名と比較的少数であった。そのため、児童の事前-事後あるいは児童-保護者間におけるアンケート結果の統計的比較検討ができなかった。二つ目に、今回公募を行った小学校が近隣の小学校に限っているため、一般化する場合には限界がある。

薬局において、今回のようなイベントを開催する利点として、まずは、地域住民との関わりの場が増え、薬剤師が地域住民にとって身近な

存在となること、相談しやすい関係づくりにつながることが考えられる。今後、多くの薬局において、薬の正しい使い方に関するイベントが開催されることで、地域住民の医薬品の適正使用や健康サポートを担っていくことを期待したい。

5. 利益相反

利益相反に相当する事項はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省：患者のための薬局ビジョン ,https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/vision_1.pdf, 2019年5月20日アクセス。
- 2) 坂口眞弓, 実習生とともに取り組む薬局におけるセルフメディケーション推進活動, 薬学雑誌, 2016; 136: 951-954.
- 3) 厚生労働省：健康サポート薬局の届け出件数（平成 31 年 3 月 29 日時点）<https://www.mhlw.go.jp/content/000507328.pdf>, 2019年5月22日アクセス
- 4) 加藤哲太, Over the Counter (OTC) 医療の指導における薬剤師・薬学生の役割, 薬学雑誌, 2014; 134: 223-235.
- 5) 宮本法子, 国民に対するくすり教育の法的変遷とその重要性, 薬学雑誌, 2016; 136: 1001-1015.
- 6) 酒井理紗, 岸本桂子, 福島紀子, 小学生時の発達段階別薬育が中学生の医薬品への理解と適正使用に与える影響の検討, 社会薬学, 2014; 33: 8-14.
- 7) 寺町ひとみ, 太田拓希, 香田由美, 鬼頭

- 英明, 駒田奈月, 志賀仁美, 田村顕人, 館知也, 土屋照雄, 勝野眞吾, 小・中・高校生の「医薬品の正しい使い方」に関する知識・意識および指導実施状況, 医療薬学, 2012; 38: 767-779.
- 8) 五十嵐仁, 國土将平, 松本健治, 小学校における親子のコミュニケーションと保護者の安全・危険意識, 発育発達研究, 2009; 42: 1-10.
- 9) 金良桃子, 國吉真哉, 家族とのコミュニケーションと生活技術の定着について, 日本家庭科教育学会誌, 2013; 55: 237-245.
- 10) 日本学校保健会: くすりってなあに? (小学生用)
<http://www.hokenkai.or.jp/iyakuhin/01.pdf>, 2019年5月22日アクセス.
- 11) 日本学校保健会: 医薬品の正しい使い方 指導者用解説 (小・中学生用)
<http://www.hokenkai.or.jp/iyakuhin/04-1.pdf>, 2019年5月22日アクセス.
- 12) 斎藤百枝美, 山岸優香, 斎藤せい子, 江戸清人, 義務教育における薬の基礎知識に関する講義の実践—段階別テキスト作成のコンセプト及びそれをういた講義のプレリミナリーな評価—, 薬学雑誌, 2001; 121: 247-252.
- 13) 福島紀子, 小学校における発達段階別薬育の構築—薬育のできる人材育成を視野に入れた取組み—, 医薬品情報学, 2014; 16: N26-N28.
- 14) 櫛田真由, 小谷 悠, 水野智博, 室崎千尋, 浅井玲名, 肥田裕丈, 平林 彩, 鶴飼麻由, 萩野由里恵, 後藤 綾, 山下加織, 松本友里恵, 毛利彰宏, 鍋島俊隆, 野田幸裕, 薬学生主導による児童向け出前くすり実験授業の有用性, 医療薬学, 2013; 39: 10-17.